京都地方・簡易裁判所発掘調査

見学会資料

『洛中洛外図屏風（池田家本）』に描かれた調査地周辺の様子

1998年４月25日

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

京都地方・簡易裁判所の発掘調査

場　　所　　京都市中京区柳馬場通丸太町下る四丁目
期　　間　　1997年10月～継続中
調査面積　　約1800㎡
調査主体　　（財）京都市埋蔵文化財研究所

1．調査地周辺の歴史

平安京が造られる前、調査地南側・御所南小学校の調査で古墳時代から飛鳥時代（約1600～1300年前）の川の跡が発見されました。また、烏丸丸太町南西角の調査では古墳時代の住居跡も見つかっており、周辺に集落があったことが想像できます。

平安時代（約800～1200年前）、調査地は平安京の一部でした。北側を春日小路（現在の丸太町通）・西側を万里小路（現在の柳馬場通）・南側を大炊御門大路（現在の竹屋町通）・東側を富小路（現在の富小路より東側）に囲まれたこの区画は、当時の地名表記の方法では左京二条四坊十町にあたります。この地には平安時代後期から鎌倉時代にかけて（約700～900年前）白河法皇・後鳥羽上皇らの御所となった「春日殿（大炊御門殿）」があったことが記録に残っています。周辺にも天皇・皇族や位の高い貴族の邸宅が多数営まれていました。

室町時代（約400～700年前）の調査地周辺についてはよく分かっていませんが、室町時代中頃（約600年前）には、ここに室町幕府の要人であった畠山持国の屋敷があったといわれています。

桃山時代（約400年前）になると豊臣秀吉が京都の町を改造します。富小路が現在の場所に造られたのもこの頃です。江戸時代前期（約300～400年前）には、調査地に松平中務少輔の京都屋敷が造られました。しかし、この屋敷は間もなく取り壊されたようで、江戸時代中期から後期（約300～130年前）には、近隣と同様の町家が建ち並んでいた様です。調査地南側の調査では室町時代には邸宅として活用されていた土地が、江戸時代になって町家に変化する様子を詳細に明らかにすることができました。

2．いままでの調査の経過

今回の調査は、裁判所の建替え工事に伴う発掘調査です。遺跡があることが分かっている場所で工事を行なう時には、それぞれの時代の遺跡の調査をすることになっています。数千年の歴史の積み重なりがある、京都のような町では、なおさらです。

発掘調査は、敷地南西側の第１区と北側の第２区の二つに分けてすすめることにしま

した。10月上旬から第１区に取り掛かっています。第１区は南北約50m・東西約35mの広さがあります。第２区では、土木機械を使って盛土を取りはずしています。第１区では遺跡の上に約１mの厚さで解体された裁判所の建物の盛土が残っており、また、建物の基礎によって壊されていた部分もありました。東部には大きな基礎が今も残って並んでいます。

機械で盛土を取りはずした後の調査は、基本的にすべて手作業になります。土の表面を丁寧に削って、土の色や手ざわりの違いを見極め、昔の人が掘った穴を見つけていきます。見つけた穴をまとめると図５・６の様になります。いろいろな形や大きさの穴がありますが、これらは調査が進むにつれて井戸や柱穴であることが分かってきます。

３．江戸時代中期から後期の調査

江戸時代中期から後期（今から約300～130年前）の調査では、建物の柱穴や井戸、石を積み上げた穴などが見つかりました。丸くて大きな穴はほとんどが井戸の跡です。また、長方形や楕円形の大きな穴の多くはごみを処理した穴と考えられ、茶椀・皿などの食器、壷・甕などの貯蔵器、屋根瓦などがたくさん出土しました。石を積み上げた穴には直径１m未満の小型のものから、深さが２m近くもあるものまでいろいろな形が見られます。形によって使い分けられていたはずですが、用途はよく分かりません。柱穴も多く見つかりましたが、壊されている部分が多いため建物の間口や奥行きを復元することができません。しかしながら、一部で敷地境の低い石垣や土間に貼った土が残っていたので、通庭のある町家が建ち並んでいたと想像できます。

４．室町時代後半から江戸時代前期の調査）

室町時代後半から江戸時代前期（今から約600～300年前）の調査では、建物の柱穴・塀・石室（いしむろ）・ごみを処理した穴などが見つかりました。塀は南北方向・東西方向それぞれ１基ずつあり、芯になる柱を据えた礎石が一列に並んでいました。特に東西方向の塀は『洛中絵図』によると松平邸と町家の境界付近にあたっています。石室は石を方形に積み上げて作ったもので、地下式の貯蔵施設と考えています。ごみを処理した穴は調査区中央部に多く、大きな穴を何度も掘り直して陶磁器や瓦などを捨てていました。また、調査区北部には浅い穴に握りこぶしほどの大きさの石を乱雑に入れてありました。仮に「石敷」と呼んでいますが、機能は分かりません。遺物も多く出土しましたが、調査している遺跡の年代がさかのぼったため、釉薬をかけた陶磁器よりも素焼きの焼き物である土師器の割合が多くなってきています。

5．現在の調査の様子

現在は平安時代後期から室町時代前半（今から約900～600年前）の調査を行なっています。非常に凸凹が多いため遺跡の様子が分かりにくい状態ですが、これは調査が進むにつれてより新しい時代の遺跡によって壊されている部分が増えているからです。この時期のものでは建物の柱穴・ごみを処理した穴などが見つかっています。中には平安時代後期の屋根瓦がまとまって出土した穴もあります。今後、第１区はさらに古い平安時代中期以前の遺跡の調査を行ないます。また、第２区ではあらためて江戸時代中期から後期の遺跡の調査から開始する予定です。

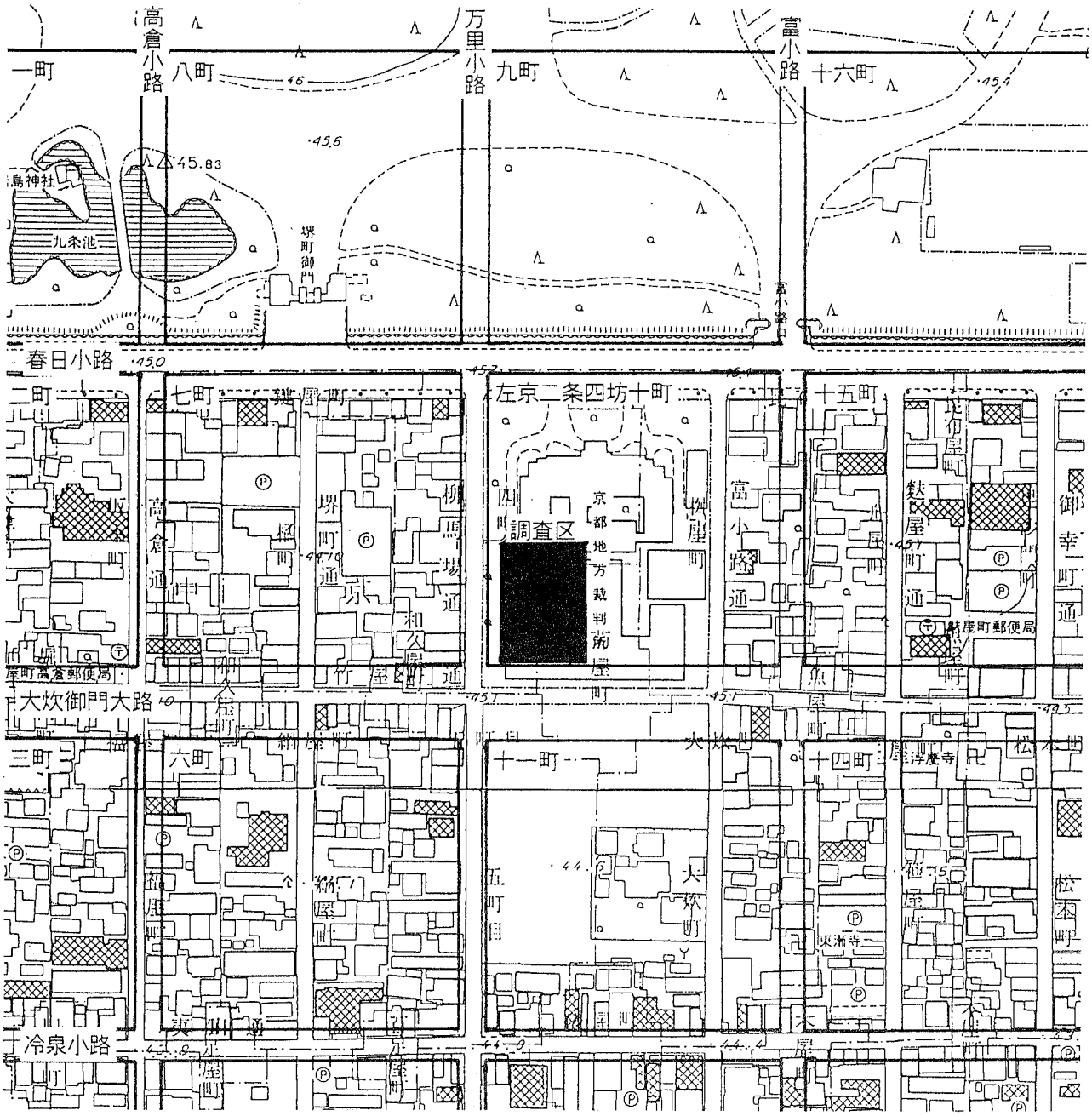

図１　調査位置図（１／2500）

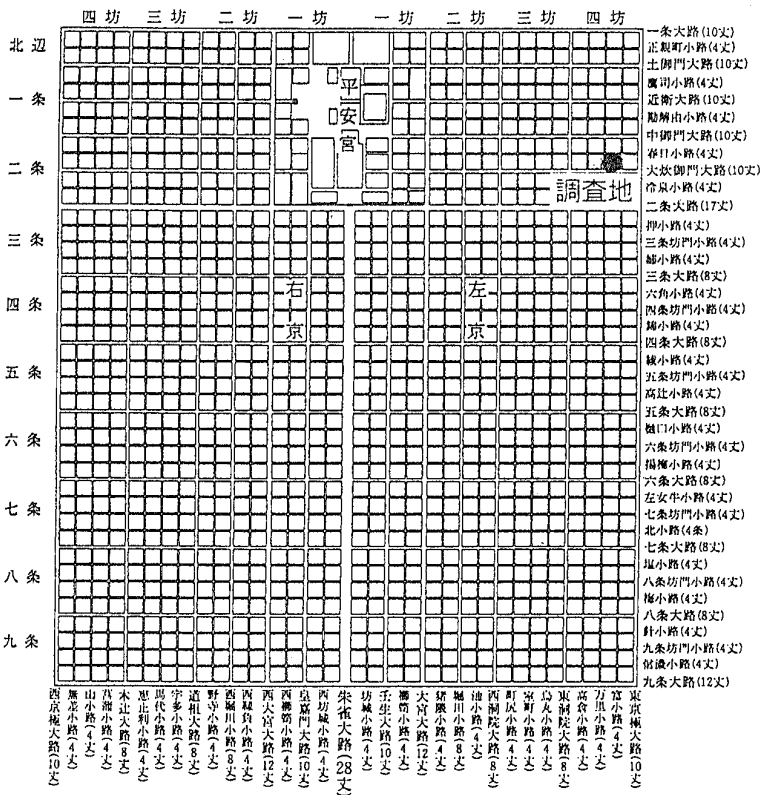

図２　平安京条坊復元図

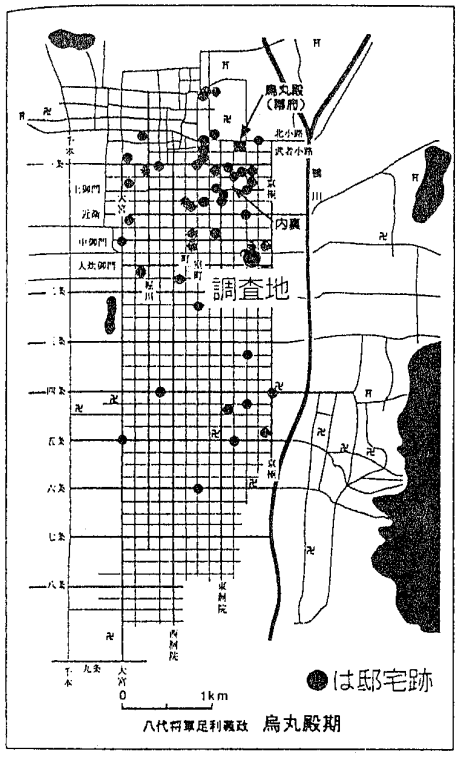

図３　京都市街復元図（室町時代中期）
田坂泰之「室町期京都の武家邸宅地について」
京都文化博物館『京都・激動の中世』

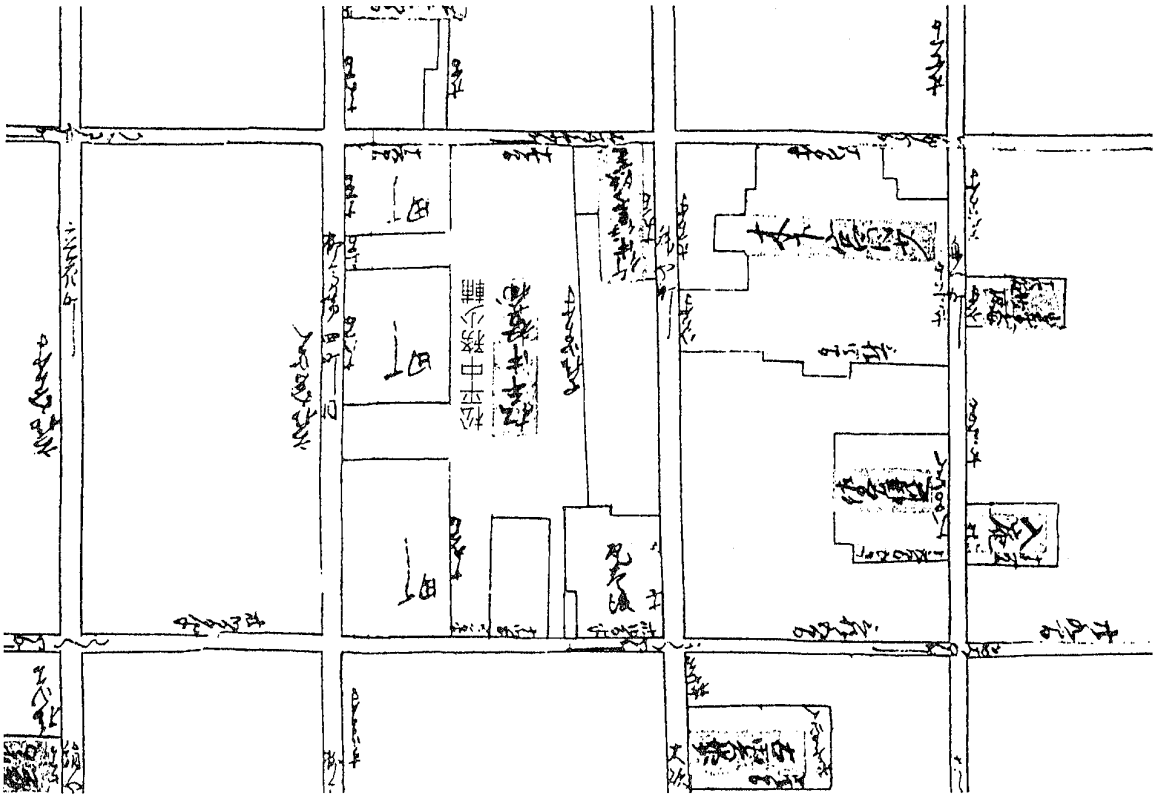

図４　江戸時代周辺の調査地周辺（『洛中絵図』より）

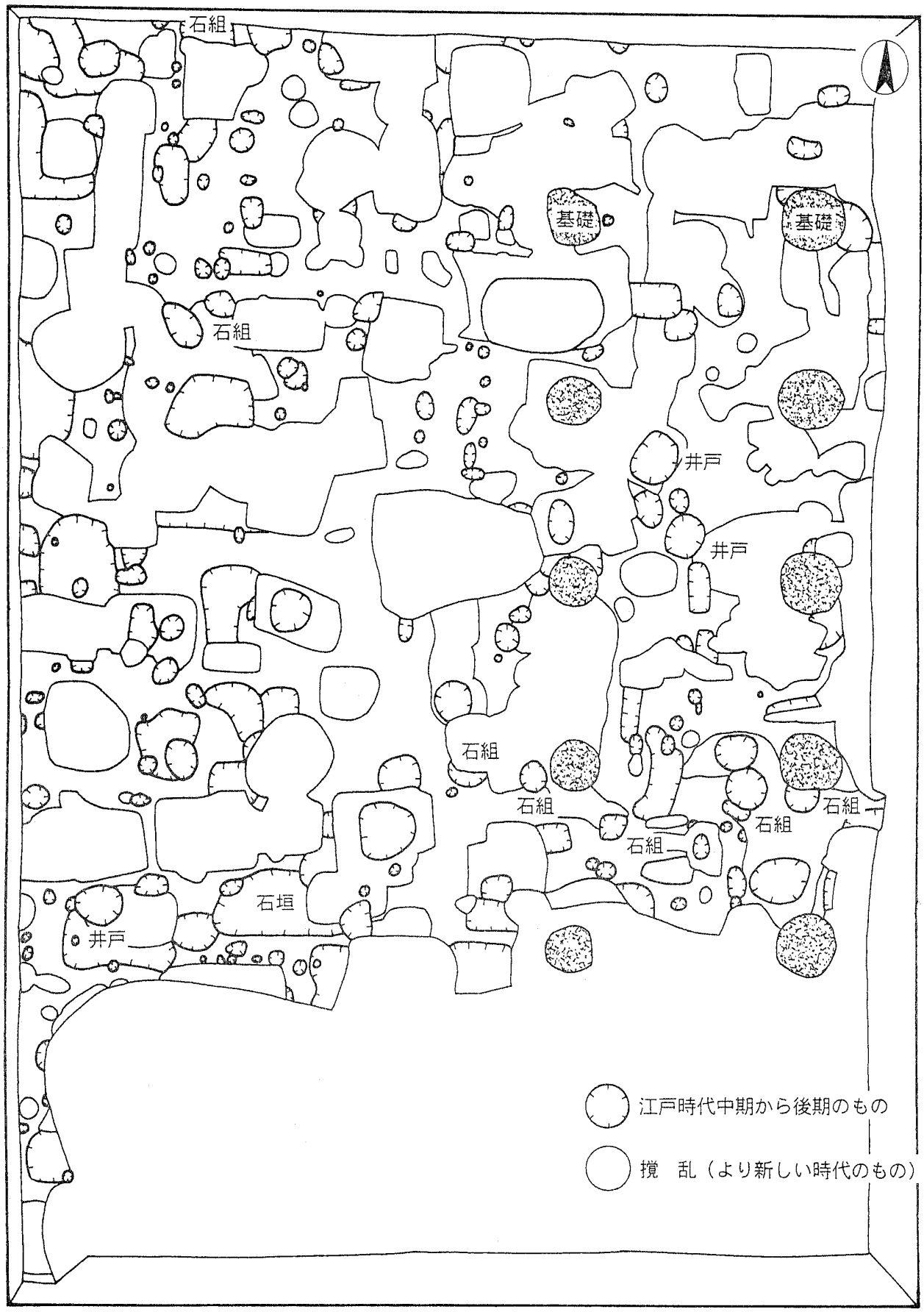

図５　第１区第１面調査状況図（１／２００）

図６　第１区第２面調査状況図（１／２００）

写真１　第１区第１面全景（北から）

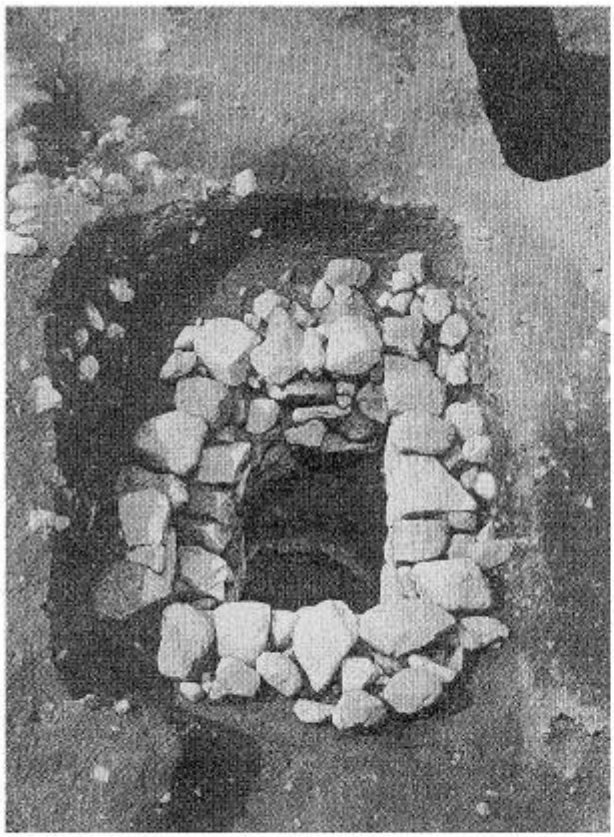

写真２　石室（東から）

写真３　かまど（東から）

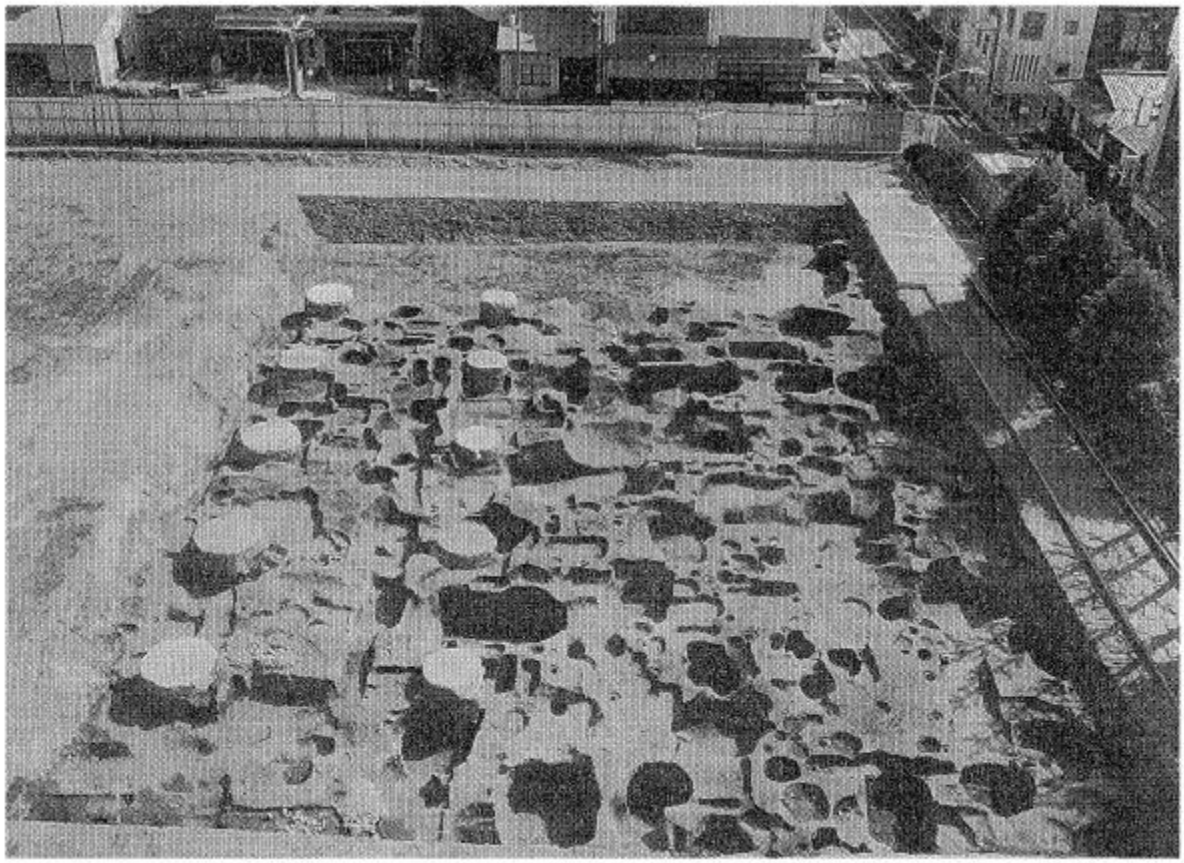

写真4　第1区第2面全景（北から）

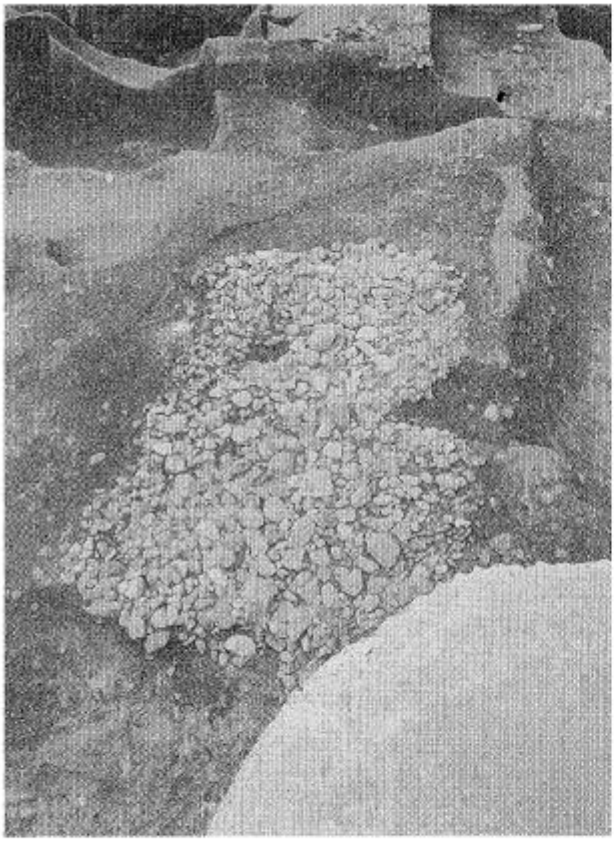

写真5　石敷き（東から）

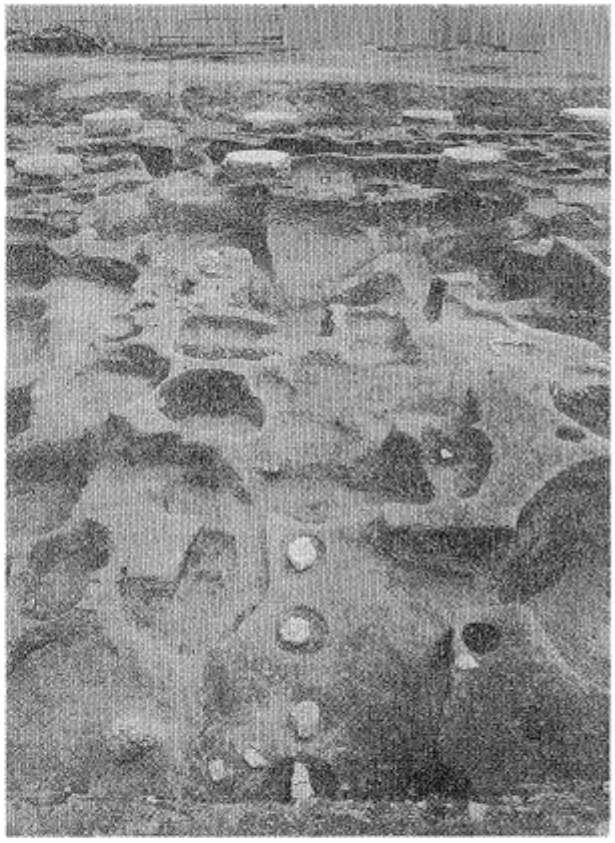

写真6　塀（西から）